

「ユビキタス時代の歩み方講座」第2回 2006/3月号

「ユビキタスって何？」

速水 智子

<http://www.hayamizu.jp>

みなさま、こんにちは。

今世の中は、かつてないほどの大変革の時代を迎えています。これまでの価値感や働き方など私たちを取り巻く生活は、急激に変わろうとしています。このことを「明治維新以来の大変化だ。」と言う人もいれば、「6500万年前に地球に隕石が落下し、恐竜が絶滅して以来の大変化だ。」ととらえる専門家もいるほどです。このような新しい社会を、「IT社会」と言ったり、新しい表現としては、「ユビキタス社会」と言ったりします。

では、このような変化はなぜ、おこったのでしょうか。そして、私たちの生活はどのように変わのでしょうか。今回は、この時代を象徴する「ユビキタス」という言葉についてお話をしていきます。

ユビキタスの言葉の由来

現在では、ユビキタスという言葉は、いつでもどこでもコンピュータにつながるといった意味で使われますが、そもそもユビキタス・コンピューティングという言葉は、米国で生まれました。1980年代の終わりに、マーク・ワイザーという米国の研究者がその考えを提案したのが始まりです。元々の意味は、私たちの身の回りのいろいろな物にコンピュータが埋め込まれ、私たちがその存在を意識しなくても、目に見えないコンピュータが助けてくれるようにしようという発想を表すものだったのです。

神のごとく遍在する

新しいことを広めていくときには、名前をつけるといったことがとても大切になります。欧米人は、この名前のつけ方に絶妙なセンスをもっていると言われますが、ユビキタスという言葉もそうでした。

英語はその語源をたどるとラテン語に行き着く単語がたくさんあります。ユビキタスという言葉もラテン語が語源となっています。この言葉は不思議な響きをもっていますが、実は「神はどこにでも遍在する」という宗教用語からきたものなのです。神は、私たちの身の回りのどこにでもおられて、私たちのことを見守っておられる、ということから、コンピュータがあらゆる場所に存在して、私たちが助けてくれるというイメージを伝えるために、この言葉を使ったようです。

マーク・ワイザーさんが、宗教用語を現代の最先端の考え方に結びつけることは、恐れ多い気もしますが、意表をつくネーミングには驚かされますね。

話しはそれですが、欧米人が通常考える「神」は一神教の神なので、当然、ここでは一つの神があらゆるところにいて、全体を統一するイメージになります。つまり、それをユビキタスネットワークにおきかえてみると、多くの小型のコンピュータがネットワークでつながって、一つのしくみのもとで世界は成り立っていることになります。

しかし、実際のユビキタスネットワークはもっと多様なコンピュータと多様な仕組みが個別に動いています。そして、個別なもの同士が連係したり、協調して、人間を助けるといったしくみのようです。むしろ、多神教の世界の方が近いイメージです。

ユビキタスコンピュータの権威である坂村健氏による“八百万（やおろず）のユビキタス”といった方がふさわしいかもしれません。

見えないコンピュータ

このように、ユビキタスコンピュータの考えは、その後、コンピュータの小型化とネットワーク技術の発達によって、現在では様々な分野で実用化されています。ICチップというものがあります。これは、まだ簡単な機能しかありませんが、小さなコンピュータといえます。0.4ミリ角のICチップのCMをご覧になった方もあると思います。

野菜の梱包につけたりします。このICチップには番号がついており、そしてその番号を無線を使って読み取って、データベースからその番号に対応する情報を読み出します。買い物のカートにその品物を入れるだけで、どこの産地の誰が作ったもので、どんな肥料を使っていたかなどの履歴情報がわかるようになります。

このように小さな小さなチップですが、コンピュータの機能の一端を担っているわけです。ゴマ粒のような小さなコンピュータであっても、通信ができる機能をもっていることがとても重要なことです。通信によって、小さなコンピュータは他のコンピュータとつながりより高度な作業を行うことができるのです。

改札でカードをかざすだけで通ることができるスイカといったICカードを持ったり、お財布携帯でお買い物をしたりすることはすでに経験している人もいるでしょう。

今後、ますますこの小さくなったコンピュータが身の回りにある電化製品や家や車など、生活の至るところで、私たちを支援して、快適な暮らしをもたらしてくれることはそれほど遠いことではないでしょう。

このように、私たちを便利な生活へと導く技術の発展は決して悪いことではありません。しかし、本当のところ、私たちが一番望んでいることは、便利さや効率性の追求では無いはずです。

本当に私たちが願うものは、安全や安心、そして信頼に包まれた社会の実現ではないでしょうか。

そのためには、私たち一人ひとりが社会へのビジョンを持ち、私たちの意思が未来を創

ることに気づく必要があるかもしれません。

その時初めて、私たちを見守って下さる存在がそっと、手を差し伸べてくれるのではないのでしょうか。

今回は、コンピュータのソフトの世界で実際に起きているオープン化の思想についてお話をしたいと思います。ソフトの世界で圧倒的な力を見せるマイクロソフト社。かたやフィンランドのプログラマーが作り、広がったソフト、リナックス。この2つのソフトの広がりには、これまでに無い地球規模の人々の協力のドラマがありました。

そんなエピソードとその新しい思想についてお話していきます。

2006/03